

明治期における『婦女新聞』 —読者投稿欄の分析を通して—

熊井 麻衣

本研究は、明治 30 年代に、女性の地位向上を目的として創刊された『婦女新聞』、とりわけその読者投稿欄を分析することで、明治期の女性啓蒙誌に対する読者の反応を明らかにし、さらに女性啓蒙誌として扱われてきた『婦女新聞』に新たな視点を加えることを試みる。

『婦女新聞』が創刊された明治 30 年代は、明治初期に盛んであった女性啓蒙誌の勢いが衰え、読者獲得を目指した商業的な女性誌の勢いが盛んとなったとされる。この流れにおいて、『婦女新聞』は 1900 (明治 33) 年に福島四郎 (1874—1945) によって創刊され、42 年間刊行され続けた女性啓蒙誌で、創刊から廃刊までの編集もすべて福島が行った。また、本誌は、明治初期に発刊された『女學雑誌』(1885—1904) や『貴女の友』(1887—1892) といった女性啓蒙誌よりも、長い期間刊行を継続し得た雑誌でもあった。

この『婦女新聞』に関する先行研究には、掲載記事を用いて当時の生活問題や家庭問題、女子教育問題などを探ったもの、福島自身が書いた社説からその思想を読みとろうとしたものがみられる。しかし、いずれも記事やその書き手側に着目した研究であり、記事の読み手の側を研究したものや読者投稿欄を利用した研究はなかった。

本研究では、この『婦女新聞』のうち、明治期に限定して分析を行った。とくに、読者投稿欄を使って、職業、居住地、年齢層といった投稿者の属性を明らかにするとともに、どのような内容に反応を示し、どのような意見を投稿していたのかを詳細に分析した。これらの分析から、読者の側からの『婦女新聞』の位置づけについて考察した。

その結果、読者投稿欄にみられる『婦女新聞』の読者は日本全国に散在しており、海外に居住する日本人読者もいた。男性よりも女性読者が圧倒的に多く、年齢層は 20 代～30 代が 8 割以上を占めていた。さらに、女学生の読者が最も多く、ほかに女性の父兄、教員、看護婦や下女などがいたことが分かった。読者は本誌の育児や料理、結婚などといった生活に関わりのある内容に反応を示し、職業や勉学に関わる情報の収集や交換の場として本誌を使用していた。さらに、読者投稿欄という場において、趣味を通じた交流を行っていたことが分かった。女性啓蒙的な記事に対する読者の反応も見られたが、それはかなり少ないものであった。このことは、『婦女新聞』が読者にとっては女性啓蒙誌とは異なる性格をもっていたことを示唆している。

また、当時の女性誌の流れにおいて特異な位置にあった『婦女新聞』が長い期間刊行を継続し得た要因を研究する上で、本研究は、読者の興味や関心の所在が重要になることを示唆しており、このような今後の研究課題を提示できたことにも本研究の意義があると考えられる。

(指導教員 原 淳之)